

Title	中國共産黨指導部に關する一考察：八期中央委員を中心として
Sub Title	A study on the leadership of the Chinese communist party
Author	石川, 忠雄(Ishikawa, Tadao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1961
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.34, No.7 (1961. 7) ,p.1- 17
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説 挿表
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19610715-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19610715-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 中國共產黨指導部に關する一考察

——八期中央委員を中心として——

石 川 忠 雄

—

こんにち中華人民共和國においては、經濟、社會、文化をはじめあらゆるものが政治を中心として展開されており、そのような政治の背後にあつてこれを推進しているもつとも重要な原動力が中國共產黨であることは、ここに改めて説明するまでもないことである。したがつて、中國共產黨の權力構造を理解し、そのリーダーシップの性格を明らかにすることは、中國の政治、經濟、社會、文化その他あらゆる領域におよぼすその影響力の大きさから考えて、極めて重要な意味をもつているといわなければならないのである。

それだけに、中國共產黨のリーダーシップの問題については、こんにち各方面でいろいろな見方がおこなわれている。たとえば、中國共產黨のリーダーシップは一枚岩的なものであるとする見方もあるし、毛澤東と劉少奇との對立説、いわゆる國際派と民族派との對立説、劉少奇派と周恩來派との對立説など、中國共產黨内部における權力闘争の存在を主張し、リ

ダーシッポの不安定性を説く見方も存在しているようである。またこれとやらんで、中國共產黨内部には、そのときどきの政策をめぐる見解の對立はあるにしても、いわゆる派閥的對立はないとする見方も存在しているのである。

このように、とくに中國共產黨のリーダーシッポの安定性をめぐつていろいろな見方がおこなわれているにもかかわらず、これをうらづける根據は極めて薄弱であり、多く推測の域をでるものではない。もちろん、現在の條件のもとでは、この問題にかんするインフォメーションの極端な不足、人間關係のもつ特殊な複雑な非合理的性格からくる正確な理解の困難さ、などからいつて、中國共產黨指導部の實態を正しく理解することは決して容易なことではない。しかしながら、たんなる推測ではなく、中國共產黨におけるリーダーシッポの性格について、できうるかぎり根據のある判断をおこなうように努力することは是非とも必要であり、本稿は、この意味において、主として中國共產黨のリーダーシッポの安定性もしくは統一性の問題について、八期中央委員の過去における經歷を基礎として、その主要な傾向を明らかにしようとしたものである。

ただここで、わたくしは、本稿についてつぎの二點を指摘しておかなければならない。その一つは、この研究が前述したように八期中央委員の過去の經歷を基礎としたものである、ということである。いいかえれば、この研究は、主として中國共產黨の現指導部の主要な傾向を過去の經歷という觀點からのみ明らかにしたものであり、現指導部を理解する一般的基礎を提供するものであることはたしかであるにしても、その將來への動向を理解するためには、なお検討されなければならない諸要因がのこされているということである。その二は、この研究で使用した資料の問題である。後述するように、本稿で検討の對象となつた八期中央委員は九六名であるが、これらの人々に關するインフォメーションは決して十分なものでなく、そのうえ、たとえば年齢、黨歴、入黨時期、教育などについて相互に<sup>1)</sup>くい違つている場合があり、その際いづれが正しいかを確定することは、こんにちのところ極めて困難な状態にあるといわなければならないのである。その意味において、本稿におけるリーダーシッポの分析は、テンタティヴな性格をもたざるをえない、といわなければならないであろう。

(1) 本稿において、中央委員の経歴を調査するために直接使用した主要な資料は、(一)外務省アジア局「現代中國人名辭典」(二)中國研究所「現代中國辭典」(三)中國研究所「現代中國事典」(四)平凡社「アジア歴史事典」(未完)(五)張大軍「中共人名典」(香港)(六)新中國人物誌「週末報社刊・香港」(七)「一九五〇人民年鑑」(大公書局刊・香港)(八)華應申「中國共產黨烈士傳」(北京)(九)Max Perleberg, *Who's Who in Modern China, Hong Kong, 1954.* (十)Robert S. Elegant, *China's Red Masters, New York, 1951.* (十一)Nym Wales, *Red Dust: Autobiographies of Chinese Communists, Stanford, 1952.* (十二)支聯研究所(香港)所藏「中共人名カード」(マイクログラフ)などであるが、これ以外にもインフォメイションの不足を補う意味で中國共產黨史に關する資料も使用した。しかし、ここでは、それについて一つ一つ列擧することは避けることとする。

## 二

まずはじめに、中國共產黨のリーダーシップのもつ主要な傾向を明らかにするために、中央委員を分析の對象とした理由を一言しておこう。そのためには、中國共產黨の組織について概観しておくことが必要である。

現在の中國共產黨の組織を規定しているものは、一九五六年九月の中共八大會第一回會議で決定された「中國共產黨規約」(一九四五年の七全大會で制定された規約を大幅に改正したものである)<sup>(1)</sup>である。この規約によると、中國共產黨は、「民主集中制」の組織原則にしたがつて、地域と生産單位とを基礎として組織されている。ここにいう地域とは現實には行政單位のことであつて、生産單位をもふくめて、下から郷・鎮一縣・自治縣・市一省・自治區・直轄市・自治州一全國(中央組織)という順序で各級黨組織が設けられ、下からの積みあげと、上からのコントロールとがおこなわれているのである。

このような黨組織のなかにあつて、黨の最高權力機關は全國代表大會である。全國代表大會の任期は五年、原則として毎年一回中央委員會によつて召集されることになつてゐる。しかし、實際には、必ずしもこの規約どおりに召集されているわけではなく、現にこの規約採擇後も全國代表大會は一九五七年、五九年および六〇年には召集されていないのである。

全國代表大會の職權は、(一)中央委員會および中央のその他の機關の報告を聽取し、審議すること (二)黨の方針と政策を決定すること (三)黨の規約を改正すること (四)中央委員會を選出すること——などであるが、いうまでもなく黨の組織という面からみて全國代表大會のもつとも重要な權限は、中央委員會を選出することである。

すなわち、中央委員會は(主席一名、副主席若干名、總書記一名を設け、必要な場合には名譽主席一名を設けることができ、中央委員および候補委員の定数は全國代表大會によつて決定される)、全國代表大會によつて五年の任期をもつて選出され、大會の閉會期間中は黨の最高指導機關として黨の全活動を指導し、大會の決議を執行し、黨を代表して他の政黨および團體と關係をむすび、黨幹部を配置することによつて組織部・宣傳部・農村工作部・統一戰線工作部・工業工作部・交通工作部・財政貿易工作部・婦人部・中央監察委員會などの黨機關の活動を指導し、さらに人民解放軍總政治部をつうじて軍隊内部の黨の思想工作と組織工作をコントロールすることになつてゐるのである。とくに全國代表大會の開催が一年に一回であり、しかも必ずしも規約どおりに召集されてゐないことを考えると、この中央委員會のもつ役割は極めて重大であるといわなければならぬのである。

中國共產黨規約によると、中央委員會の總會は毎年少くとも二回中央政治局が召集しなければならないことになつてゐるが、この委員會總會の閉會期間中、中央委員會の職權を行使する機關としては、中央委員會によつて選出される中央政治局(主席・副主席が設けられ中央委員會の主席・副主席が兼任する)と中央政治局常任委員會がある。いかえれば、中央政治局とくに中央政治局常任委員會は、事實上黨の指導と政策決定の中心的機關であるといわなければならないのである。このほか、中央政治局と中央政治局常任委員會の指導のもとに中央の日常活動を處理するものとして中央書記處が設けられてゐるけれども、その地位は、一九四五年の七全大會で制定された前規約にくらべれば、著しく低いものになつてゐる。<sup>(2)</sup>

以上のような中國共產黨の組織からみて、その指導と政策決定機關の頂點が中央政治局常任委員會に、ついで中央政治局

にあることは明らかである。この點から考えれば、たしかに中央委員會はその開會の頻度および九七名（うち死亡一）という規模の大きさから考えて、黨の日常の諸決定において主要な役割をはたすことは困難であるといつてよいであらう。しかし、中央政治局常任委員會委員というような中國共產黨の最高指導部を形成する人々にとつて、中央委員會はいわばその權力の基礎をなすものであり、中央委員會のなかに強力な支持層をもつことによつて自己の權力的地位を支えられているといふこともできるのである。のみならず、中央委員會は、新しい最高指導部が形成される場合に、つねにその源泉的な役割をはたすものである。このような意味で、中央委員會がどのような人々によつて構成され、どのような特徴をもち、また最高指導部とどのようなかたちでつながっているかを理解することは、中國共產黨のリーダーシップの安定性もしくは統一性をめぐる諸問題を明らかにするために、どうしても必要であるといわなければならないのである。わたくしが、この小論で、八期中央委員會を検討の對象としたのは、このような理由によるものである。そこで、つぎに八期中央委員のもつ特徴を検討することとしよう。

(1) 中國共產黨の黨組織の詳細については、アジア政經學會編「中國政治經濟綜覽——昭和三十五年度版——」拙稿「黨の組織」の項を参照されたい。

(2) 現在の中央政治局常任委員會、中央政治局、および中央書記處のメンバーおよび黨中央機關の責任者はつぎのとおりである。

中央政治局常任委員會 毛澤東・劉少奇・周恩來・朱德・陳雲・鄧小平・林彪（林は一九五八年五月選出）

中央政治局 毛澤東（主席）・劉少奇・周恩來・朱德・陳雲・林彪（以上副主席）・鄧小平・董必武・彭眞・羅榮桓・陳毅・李富春・彭德懷・劉伯承・賀龍・李先念・柯慶施・李井泉・譚震林（羅以下李先念——彭を除く——までは一九五六年九月に選出、柯以下は一九五八年五月選出）

候補局員 烏蘭夫・張聞天・陸定一・陳伯達・康生・薄一波

中央書記處 總書記鄧小平 書記鄧小平・彭眞・王稼祥・譚震林・譚政・黃克誠・李雪峯・李富春・李先念 同候補書記劉瀾濤・楊尚楨・胡喬木

中央委員會直轄機關 組織部長安子文 宣傳部長陸定一 統一戰線工作部長李維漢 工業工作部長李雪峯 交通工作部長曾山 財政貿易工作部長馬明方 農村工作部長鄧子恢 (副部長譚震林) 婦人部長蔡暢 「新華社」社長吳冷西 「人民日報」社長吳冷西 「紅旗」編輯長陳伯達  
中央監察委員會 王從吾以下十七人

三

現在の八期中央委員會は、九七名(うち林伯渠死亡)の正規中央委員によつて構成されている。この中央委員九七名をみてまず氣のつくことは、第一表(後出折込)で見られるように、一九四五年の七全大會で選出された中央委員四名のうち、死亡した五名(陳潭秋・關向應・王若飛・秦邦憲・任弼時)と一九五四年から五五年にかけて追放された高崗・饒漱石の二名を除いた全員と、七全大會における候補中央委員三三名のうち、死亡もしくは除名されたもの六名を除いた二七名(このうち廖承志・王稼祥・陳伯達・黃克誠は中央委員にすでに昇格していたため、八全大會直前の候補委員は二三名、正規の中央委員は四一名であつた)がそのまま八期中央委員に選出され、さらに當時中央委員および候補中央委員のいずれにも入らなかつた三三名があらたに八期中央委員に選出されている、ということである。この事實は、いうまでもなく、七全大會で選出された中央委員と候補中央委員のほとんどすべてが、八全大會でそのまま選任もしくは昇格したことをしめすものであつて、このことは、高崗・饒漱石のような特殊な場合を除いて、これまで中國共產黨の内部で、指導部の權力的地位を轉換させるような重大な事態が存在しなかつたことをしめしているように考えられるのである。そのような事態には、一般的にみて二つのケースが考えられる。その一つは、全體としてみても黨内に鞏固な統一と團結が維持されてきた場合であり、いま一つは、かりに黨内に派閥のようなものが存在していたとしても、その間の勢力均衡が維持されてきた場合であるが、いずれにしても黨内に調和が存在し、その安定が持續されてきたことをしめしているといつてよいであらう。

つぎに、中央委員の年齢についてであるが、まず注目される點は、第二表でみられるように、九六名の中央委員のうち、五五名が六〇歳以下であり、しかも年齢不明なもの一五名もおおむね六〇歳以下と考えられることである。いいかえれば、中央委員の約七五%が六〇歳以下であり、しかも五五歳以下が二八名、年齢不明なもの一五名中その大部分は五五歳以下と考えられる根拠があるので、五五歳以下のものが約四二%をしめていることになる。このことは、年齢的に中國共産黨のリーダーシップが老朽化したものではなく、それ自身の判断力のある集團であることをしめしている。しかも、黨の最高指導者である毛澤東は六五歳、劉少奇は六二歳、周恩來は六四歳、朱徳は七四歳で、しだいに老年に入りながらも、いぜんとしてまだ指導的地位にあつて活動をつづける状態にあるといつてよいであろう。しかし、他面その状態はここ十年前後のことであつて、その時期には最高指導層の交替とそれにもなうリーダーシップの再編成がおこなわれることになるであらう。この場合、年齢の點でとくに注目されるのは、六一歳以上の人々の大部分は、第一表でみられるように、黨の長老階層に屬する人々であつて、新世代を擔う人々は、おおむね五六歳以下で年齢差が極めて少いことである。いいかえれば、黨の長老階層を除く新しい世代の指導層はほぼ同一年齡の人々であり、後述するように中國共産黨の革命運動のなかで同じような經驗を経てきた人々であるということである。このことは、一般論としては、一方において、指導部にものも

第二表 八期中央委員年齢別分類

年 齡	人 數
66 歳 以上	8
61 — 65	16
56 — 60	27
51 — 55	26
46 — 50	2
45 歳 以下	0
不 明 確	15
不 明	2
合 計	96

(前後の3、残れる  
60歳のものを  
15名中60歳  
不明確と考  
えられれば  
56歳以下)

考え方について全體として同質的な傾向をあたえるけれども、他方において、それは黨内リーダーシップの歸屬について一種の緊張關係をうむ可能性を内包しているといわなければならない。年齢の面からみると、黨内リーダーシップの將來の安定性については、プラスとマイナスの二面が同時に存在しているといわなければならないのである。

第三表 八期中央委員出身省別分類

出身省	人数	出身省	人数
安徽	4	東州	5
浙江	0	寧西	0
福建	4	山東	1
江蘇	4	山西	6
湖北	1	陝西	5
湖南	3	四川	4
湖北	4	西康	10
湖南	30	雲南	0
江西	9	貴州	0
浙江	0	廣西	0
江蘇	4	內蒙	1
江西	5	察北	0
浙江	0	察南	0
安徽	0	合計	96

とて批判されたという説があるが、いぜんその大部分は毛澤東を支持する人々であり、フランクリン・ホウン氏のいう「毛澤東は共産黨内に強力な湖南派を育成してきている」という見解は必ずしも正確ではないにしても、ここに毛澤東の確固たる勢力の基盤があることは否定できないように思われるのである。

湖南省について中央委員の多い省は、四川省の一〇名と湖北省の九名である。四川省の一〇名とは、朱徳・鄧小平・吳玉章・羅瑞卿・劉伯承・陳毅・聶榮臻・王維舟・楊尙楨・林鐵であるが、ここで特徴的なことは、これらの人々の経歴から知られるように、その緊密な關係が四川省出身の朱徳一人に集中されていないということである。この點は、湖南の毛澤東の場合と相違するところであるといわなければならない。また、湖北省出身の中央委員、董必武・林彪・李先念・伍修權・鄭位三・徐海東・謝富治・王樹聲・楊獻珍のなかにも、董・林・李・徐・謝・楊などのように直接間接に毛澤東と密接な關係

とところで、中央委員の出身省にみいだされる特徴についてであるが、この問題についてまず目につくことは、第三表にみられるように、湖南省出身者が九六名の中央委員中三〇名をしめているということである。周知のように、湖南省は毛澤東の出身省であり、その指導のもとに多くの革命運動がおこなわれたところである。この湖南省出身者の名は第一表に明らかであるが、かれらは、その経歴から判断して、李立三、歐陽欽（経歴不詳）、李維漢（周恩来と密接な關係にあつた人物であるが、しかしこのことは李と毛との關係が不圓滑であることを意味しない）などを除いて、直接間接に毛澤東と關係をもち、毛を支持する立場にあると考えられるのである。もつとも最近湖南省出身の彭徳懷・黃克誠が右派分子とい

をもつてきた人々がおり、ここでも毛の支持層の廣さが認められるのである。

つぎに教育の問題についてであるが、第四表からしられるように、中央委員のなかで教育程度の比較的はつきりしているもの八六名中、平均教育以上の教育をうけているものは六七名で、約七八%である。このことは、黨指導部の教育程度がそれほど低いものでないことをしめしているように思われる。また、中國における革命の軍事的性格を反映して、軍學校の出身者が二〇名を數えることは注目に値するといわなければならない。もちろんこの數は、黨指導部において軍人が支配的地位をしめているということをしめすものではない。しかし、それはまた、黨内において軍のしめる地位が決して低いものではないことをしめしている、といつてよいであろう。もつとも、中國の場合の軍人は、他の一般の國家の場合とは異つた特殊

第四表 八期中央委員教育分類

教育程度	人 數
専門學校以上	47 (うち不確實 4)
軍事學校	20 ( " 1)
中學校以下 <small>(無教育を 含む)</small>	19 ( " 6)
不明	10
合計	96

な性格をもつている。すなわち、たとえ軍學校の出身者ではなくても、中央委員のほとんどすべては政治委員として軍に参加し、江西ソヴェト時期・長征時期・抗日戰爭および戦後の内戦時期に戰爭に加つた經驗をもつており、この意味ではすべてが軍人といえないこともないのであつて、現在のところ黨人と軍人とを區別する必要はないように考えられるのである。したがつて、つぎの世代の中央委員會が形成されるまで、ソヴェト連邦の場合のように軍と黨の關係をそれほど神經質に區別して考える必要はないと考へてよいであろう。

つぎに、中央委員の外國教育についてみてみよう。第五表にしめしてあるように、中央委員九六名のなかで、まったく外國教育をうけたことのないものは四九名で、中央委員總數の半數以上にのぼつている。もちろん、これらの人々のうち中華人民共和國成立以後にソ連、東歐、ときには東南アジア方面に公務の旅行をするものも多くなつてきているけれ

第五表 八期中央委員外國教育

留 學 國	人 數
連 連	31 (うち不確實 2)
ソ フ ラ	10
日	4 (うち不確實 1)
ド	1
イ	49
不	1
合 計	96

(註) 數カ國に留學したものについては主要留學國の分類に算入した。

ども、これらはいずれも短期間であり、半數以上の中央委員が長期間外國で生活したことがないという事は、中國がその國際關係を處理する場合になんらかの影響をもつてくる可能性もあるように考えられる。ただ、現在、最高指導部たとえば中央政治局に屬する人々は、多く青壯年時代に外國留學の經驗をもつており、これに加えて外交關係者には外國での生活經驗をもつている人々を配置することができるために、敍上の缺點は補われうると考えられるけれども、半數以上の中央委員が外國を經驗してないという事實は十分注目されてよいように考えられるのである。

とところでつぎに、外國留學の經驗をもつたものについてであるが、その内譯は、ソ連に留學したものの三一名、フランスに留學したもの一〇名、日本に留學したものの四名、ドイツ一名となつており、アメリカへの留學者はわずかに二人(ソ連への重複留學者で陸定一と張聞天)にすぎず、英國への留學者はまったく存在しないのである。そしてまた、ソ連への留學者も、そのほとんどすべてが一九二〇年代から一九三〇年代中期にかけて留學したものであり、その意味では、かれらの留學時期はソ連の黨内情勢および國內外情勢のもつともきびしい時期であつたといふことができるのである。これらの事實から、中國共產黨の指導部にはつぎの二つの傾向が内在する可能性があるように思われる。すなわち、その一つは、中央委員の外國留學者の大部分がソ連留學生であり、知西歐派とくに英國およびアメリカを體験的に知つているものが中央委員のなかで非常に少い、ということである。その二は、ソ連留學者のほとんどすべては、國內的にも黨内的にもきびしい困難なスターリン初期の時代にその留學をおこなつており、その意味では、現在の中共の社會主義建設にソ連の經驗を利用する點で大きな利益をえてゐる反面、現在のフルシチョフ時代のソ連については十分な理解をもちえない面が存在しているかもしれないといふことである。

ある。

つぎに、中央委員の入黨時期についてであるが、第六表でみられるように、ほとんどすべての中央委員が一九三四年以前にかえれば江西ソヴェト期以前に入黨していることは、注目されなければならない事實である。周知のように、中國共產黨の發展過程において、黨指導部のなかで毛澤東と黨歴を同じくするような古い有力な黨員は、現在ではほとんど死亡もしくは黨を去つてしまつてゐる。たとえば、中國共產黨の指導部は歴史的にみて陳獨秀（黨成立前—一九二七年七月）・瞿秋白（一九二七年八月—一九二八年六月）・李立三（一九二八年七月—一九三〇年末）・ロシア留學生派（一九三一年一月—一九三四年末）・毛澤東（一九三五年一月—現在）といつたような發展をたどつてゐるのであるが、この時期をつうじて陳獨秀・李大釗・瞿秋白・向忠發・陳潭秋などの元老は死亡し、張國燾は除名され、こんにちではわずかに李立三とロシア留學生派の若干の指導者が残つてゐるだけであり、しかもこれらの人々もすでに黨内でその勢力をふるいえない状態にあるのである。また、かつて舊有力黨員が指導部から排除された場合も、黨内に大規模な血の肅清をともなつたことはほとんどなく、その意味では、排除された指導者と密接な關係にあつた黨員も、容易に現指導部の側に移行することができたことも、注目されなければならないことであらう。これらの事實は、一九三四年以前に入黨した中央委員のほとんどすべてが、江西ソ

第六表 八期中央委員入黨時期分類

入黨時期	人数
1934年以前	91（うち不確實8）
1935年以後	1（不確實）
不明	4
合計	96

ヴェト期、長征、抗日戦争および戦後の内戦の時期をつうじて、毛澤東の指導のもとにたつたかいつづけてきたか、もしくは直接毛澤東の指導のもとになつたとしても反毛澤東運動に参加しなかつたか、あるいは究極的には毛澤東支持の方向にうごくようになったかをしめしているように考えられる。いうまでもなく、長征および抗日戦争の時期は、一九三五年一月の遵義會議で確立された毛澤東の指導権がしだいに強化され、黨の統一と團結が確固としたものになつ

ていつた時期であり、中央委員のすべてがこの時期以前に入黨しているということは、黨指導部が毛澤東のもとに全體として統一されていることをしめす一つの證據であるように考えられるのである。<sup>(3)</sup>

(1) この點については、たとえば、雜誌「東方」一九六〇年十月一日（五五頁以下参照）。

(2) Franklin W. Houn, *The Eighth Central Committee of the Chinese Communist Party: A Study of Elite, The American Political Science Review* Vol. LI, No. 2, p. 395.

(3) フランクリン・ホウン氏は、中央委員の入黨時の職業およびその社會出身について大要つぎのように述べている。すなわち、入黨時の職業の判明している中央委員八〇名（林伯渠を含む、以下同じ）のうち、學生は五〇名、軍人一一名、官僚五名、教師四名、労働者四名、作家三名、新聞記者一名、大學教授一名、船員一名、であり、學生がもつとも多いということは、中國の學生は「一般的にいつて自己の社會的停滞と政治的混亂をもつともつよく意識し」、しかも政界、官界および實業界への進出も特定の人々のみ限定されているもつとも不滿をもつた階層であつたことによるものであるとしている（*Ibid.*, p. 398）。また社會出身については、その判明している中央委員八一名のうち、地主出身が二八名、富農二三名、富裕商人一〇名、労働者七名、官僚五名、教師四名、貧農四名、であり、「この分布は、現在の中國共產黨指導部が強力なプロレタリアもしくは貧農的バックグラウンドをもつていてはなく、主として中國社會の中流および中流の上層からひきだされてきたものであることをはつきりとしめしている」（*Ibid.*, p. 397）と述べている。この社會出身の分布は、ロバート・ノース教授によれば、過去の中國共產黨の指導部にもあてはまるといふことである（Robert C. North, *Kuomintang and Chinese Communist Elites*, 1962, p. 58）。

#### 四

以上のような八期中央委員の一般特徴の検討からしられることは、この中央委員會が全體として年齢の比較的若い、活動的な、毛澤東を中心とした團結力のある、比較的教育水準の低くない——ただし西歐をあまり體驗的に知っていない、スターリン的ソ連の感覺を身につけた——指導部である、ということである。そこでつぎに、これらの事實を基礎として、八期中央委員の序列の昇降を検討し、しばしば各方面で主張されている指導部内の派閥對立説について若干の考察を加えてみ

ることしよう。

第一表にみられるように、一九四五年の七全大會で選出された七期中央委員會にくらべて、八期中央委員會の序列で著しい昇進をせしめたものは、おおむね鄧小平・吳玉章・陳伯達・羅瑞卿・鄧穎超・陳賡・李先念・烏蘭夫・蕭勁光・柯慶施・李克農・楊尙棍・李維漢・葉季壯・劉寧一・胡喬木・譚震林（序列は下落しているが、一九五八年五月中央政治局員に昇格している）。李雪峰・安子文・李井泉、の二〇名である。このほか、李富春・羅榮桓・劉伯承・陳毅の四名が中央政治局に入り、一見黨内地位の向上をせしめているようであるが、中央政治局員の數が一九五六年九月八全大會後に從來の一名から一七名に六名増員されたことを考えあわせると、これらの人々が從來の地位からいつて中央政治局に入ることは當然であり、とくに著しい昇進とはいえないように思われるのである。そこでこの著しい昇進者二〇名についてみてみると、その顔ぶれからも明らかのように、その過去の經歷から判斷して、たとえば、毛澤東・劉少奇・周恩來・朱德などの最高指導者のいずれかにとくに密接な關係をもつてきた人々のみが昇進しているという事實はみられないといわなければならない。いいかえれば、特定の系列に屬する人々のみが昇進しているのではない、ということができるのである。

つぎに、著しい下降をせしめたものとしては、葉劍英・張雲逸・康生・薄一波・張聞天・陳少敏・李葆華・曾山・李立三・呂正操・王震・陳紹禹の一二名が擧げられるが、これらの人々をみてまず目につくことは、陳紹禹、張聞天等のかつてのロシア留學生派と李立三の凋落である（第一表参照）。かれらは、すでに黨内でその影響力を失つていってよいであろう。これらの人々を除けば、著しい下降者についても、特定の系列に屬するもののみが下降しているのではないということは注目されなければならないところであろう。

これらの事實は、わたくしには、上昇および下降の問題について、系列の問題はほとんどなく、むしろ個人個人の個別的な理由にしたがつて上昇と下降がおこなわれてきたことをしめしているように思われる。たとえば、高崗・饒漱石の肅清、最

近しきりにつたえられる反右傾機會主義運動における陳雲および彭德懷の失脚説（この情報が正しいとすれば）などは、この點を證明するものといつてよいであろう。周知のように、高崗は毛澤東の信任の厚かつた人物であり、饒漱石も劉少奇と極めて密接な關係にあつた人物である。また陳雲は劉少奇と周恩來の兩者に密接な關係をもち、彭德懷も毛澤東の系列に屬する指導者である。これらの人々が肅清され、もしくは失脚がつたえられていることは、黨内地位の上昇と下降がいわゆる派閥の立場からおこなわれているのではなく、黨路線に對する忠誠の問題もしくは個人的能力の問題によるものであることをしめしていると考えるべきであらう。この意味では、周鯨文氏のいうように、いろいろな問題について意見が對立し、その問題についての賛成派と反對派のできることはあつても、黨内に派閥にまでたかめられた對立は存在しないという見方は、妥當であるといえるかもしれない。またかりに、いわゆる派閥が存在したとしても、前述したように中央委員會における毛澤東の支持層は非常に廣く、したがつてその意向によつて黨内情勢が左右されるところ大であると考えられる以上、このような狀況のもとで派閥對立を問題にすることはあまり意味がないように思われるのである。

そこでつぎに、これらの理解を基礎として、しばしばとなえられる黨指導部内の派閥對立説すなわち毛澤東・劉少奇對立説、いわゆる國際派・民族派對立説および劉少奇・周恩來對立説を簡單に検討してみることにしよう。

ただし以上のうち、毛劉對立説については、わたくしはかつて別の機會に、(一)毛劉間の關係は歴史的に極めて緊密であり、劉の中華人民共和國主席就任當時および人民公社の建設をめぐつて毛劉間に對立があつたとする見解は妥當な根據を缺いていること、(二)中ソ間の見解のくい違いは兩國の發展段階の相違、國際的地位の相違などからうまれてきているものであり、毛澤東とフルシチョフとの個人的對立に必ずしも根ざすものではなく、したがつて劉が國家主席となつてもこのようなくい違いはたえず起つてくるはずであり、その點から考えてフルシチョフが親ソ派の劉少奇と結んで毛澤東と對立したとする説も支持しがたいこと——を論じておいたので、ここではそれ以上言及しないこととする。

そこでつぎに、いわゆる國際派と民族派の對立説であるが、この場合、國際派は劉少奇を指導者とし、彭眞・康生・張聞天などこんにちまでソ連と密接な關係をもつてきた人々によつて構成され、民族派は毛澤東・朱德・周恩來などによつて代表され、民族主義的立場から中國自身の利益を中心としてその革命運動を展開してきた人々によつて構成されているというのが普通の見方である。<sup>(2)</sup>しかし、この見解は妥當な根據を缺いているように思われる。なぜであろうか。

まず第一に、歴史的にみて、國際派の指導者といわれる劉少奇と民族派の指導者といわれる毛澤東との關係は、そのような對立的なものではなく、むしろその反對に緊密な關係にあり、しかもそれがこんにちまで繼續されていると考えられることである。この點は、前述したように別の機會に論じたことがあるので、ここでは再論しないこととする。第二に、民族派に屬する指導者とされている周恩來は、張國燾が述べているように、「モスコに非常に近い」<sup>(3)</sup>存在であり、親ソ派でないとはいえないことである。いいかえれば、周恩來は、ソ連との接觸という點で、いわゆる國際派とそう明確に區別することはできない、といわなければならないのである。<sup>(4)</sup>第三に、この國際派・民族派對立説の一つの根據は、國際派の構成分子にソ連留學生が多數存在しているということであるが、ソ連留學生出身の黨指導者のなかには（その氏名については第一表参照）、毛澤東と過去において密接な關係をもつていたものもあるし、周恩來と緊密な關係にあつたものもあり、またその反對に、ソ連留學生の出身でなくとも劉少奇と緊密な關係をもつているものもあり、ソ連留學というような基準から實際に國際派と民族派の區別をおこなうことはできない——などの理由があるからである。このような事實から判断すると、國際派と民族派の對立を主張する見解は、すこぶる不明瞭な、適確な根據を缺く主張であるといわなければならないのである。

そこで、つぎに問題となるのは、劉少奇と周恩來の對立説であるが、この問題についてはつぎの三點が考慮されなければならないであろう。すなわち、まず第一に、前述したように中央委員會における毛澤東の支持層は極めて廣く、かりに劉少奇と周恩來の間に對立があつたとしても、その對立は毛澤東によつて統一されうるものであり、黨内の勢力關係の方向は毛

澤東の意向によつて大きく左右される可能性がつよい、ということである。いいかえれば、このような状況のもとにおいては、劉周對立がかりにあつたとしても、それを過大に評價することは誤りであるといわなければならないであろう。第二に、これまでの事態の経過は、劉少奇の黨内第二位の地位がかたまりつつあることをしめしており、一九五六年九月の八全大會における中央委員の序列も、劉が毛より一票少い得票で選出されているのに對し、周の順位は七全大會の三位から六位に下つている。のみならず、劉少奇が國家主席に就任することによつて軍をその指導下におくこととなつたことは、劉少奇の黨内における地位をさらに強化したことをしめすものとして、注目されなければならない事實であろう。第三に、周恩來は、これまでの中國共產黨の歴史からみて、黨の指導部がしばしば交替し、指導者がその度に失脚しているにもかかわらず、つねに最高指導部に残りつづけてきており、その場合、黨の最高指導部におりながら第二位もしくは第三位でいどの地位にあつて活動をつづけてきているのである。このことは、たとえば、李立三と周恩來、ロシア留學生派と周恩來、毛澤東と周恩來の關係をみれば明らかであり、とくに毛との關係においては、かつては周の黨内における地位のほうが毛よりたかかつたことがあるにもかかわらず、現在毛の指導下に協力關係を保持しているのである。したがつて、劉少奇の黨内における指導的地位が確定されれば、周恩來が劉少奇に協力する可能性は十分に存在するといわなければならないのである。このような事實から判斷して、毛澤東の意思が、これまでの黨内リーダーシップに關する事態の推移から推察されるように、劉少奇を自己につぐ黨内第二位の地位に固定化するところにあるとするならば、劉周對立説は派閥的對立という立場からあまり重大に評價する必要はないのではないかと考えられるのである。

いずれにしても、こんにちまでしばしば主張されてきている毛劉對立説、國際派民族派對立説、劉周對立説はともに根據が薄弱であり、中國共產黨のリーダーシップの派閥的、不安定性をとく見方は、こんにちではまだ疑問の餘地があるように思われるのである。





むしろ、党内指導者の地位の上昇と下降とをみてそれ以上につよく感じられることは、個々人の能力がその原因の一つとなつてゐることは當然であるにしても、それ以外に、毛澤東路線ないしは毛のリーダーシップに對する反對、および党内セクショナリズムの發展は斷乎として排撃されてゐる、ということである。このことは、たとえば前述した高崗・饒漱石の肅清において、はつきりとみいだされるところである。したがつて、最近中國でしきりにおこなわれてゐる反右傾機會主義闘争においても、このような過去の經驗から判斷すると、現在の中國の經濟的危機がよほど深化しないかぎり、毛・劉・周というような最高指導者の地位はうごかずに、高崗の場合にみられたように、その過去の關係のいかんをとわず反毛路線をとつた人々が個別的に指導部から排除され、黨はそれらの人々を排除したままで團結をかためていく、というかたちをとるのではないかと考えられるのである。いずれにしてもこのことは、本年中にひらかれると豫想される九全大會において、はつきりしたかたちをとつて現れてくるであらう。

- (1) この點については、雑誌「共產黨問題」(歐ア協會)四卷一號拙稿「劉少奇をめぐる若干問題」を参照されたい。
- (2) たとえば、鄭竹園「中國共產黨の十年」(日本外政學會)三〇頁を参照されたい。
- (3) Robert C. North, *Interview with Chang Kuo-fao*, 1950.
- (4) 周恩来は中華人民共和國成立以前に、一九二八年・一九三〇年・一九三九年の三回ソ連を訪れてゐる。